

次の文章を読み、後の問いに答えなさい。

滝川祥子には、秀一（中学二年生）、一将（小学六年生）、将人（小学二年生）の三人の息子がいる。将人は、大縄跳びの朝の練習（朝練）に参加せず、指導に当たっている荻野先生にみんなの前で怒られ、学校に行かなくなった。荻野先生から連絡を受け、朝練に出なかったことを知った祥子は将人を叱ったが、一将からは荻野先生の話とは違う事実を知らされた。

滝川祥子は、迷っていた。

一将の説明によると、将人は悪くない。そもそも朝練は自由参加なのに、登校した将人を荻野先生が呼び止めてみんなの前で「下手なのにどうして来ないの」と怒ったらしい。見ていてかわいそうなほど怒られた将人は、泣いていたという。それをソウゾウすると、祥子の胸はじくじくと痛んだ。

もしそれが本当だとしたら、つらい思いをした将人を、祥子はさらに叱ってしまったことになる。でも一方で、子どもの言うことをどこまで信用していいのだろうという思いもあった。疑うわけではないけれど、一将だって又聞きのようにだし、子どもは大げさに言うこともある。勘違いということだって、あり得なくはない。

でも、このことをそのままにしておいていいのだろうか……何より、将人のことが気になる。あれから、何を聞いても首をふるだけで、明らかに以前と態度が違うのだ。

一親にもわかってもらえなかった。

そのことが、いちばん将人を傷つけてしまったんじゃないだろうか。

夫に相談したけれど、「まあ、そういうことを乗り越えて、子どもは強くなっていくから」と、のんきなことを言われた。「そのうち忘れて、ケ
ロツとするさ」とも。

なんて楽天的な、と思うけれど、祥子が心配症なぶん、そののんきさに助けられたことも多い。

でも、①今回のことに関しては、罪悪感も加わって、頭から拭い去れずにいた。

一将のオサナなじみでもある咲良から、そのときのことを電話で聞くことができた。

しっかり者の咲良らしく、>理路整然と話してくれた。「荻野先生は、うそをついています」とも。

しかし、保育園のときからのママ友である咲良の母は、電話を替わるなり「ごめんなさいね、咲良がよけいなことを言って」と、恐縮していた。

「そんな、咲良ちゃんは、わざわざ教えてくれたんだから、ありがたいと思ってるよ」

そう言ったけど、

「まあ、あの子はとにかく気が強いから」

と、クシヨウしていた。

「まさか学校にどなりこみに行くつもり？」

心配そうな声をにじませて、咲良の母が言う。

「どなりこみには、行かないけど……」

荻野先生に向かって「うそをついていますね」と問い詰めても、なんの解決にもならない。でも、将人の状況や気持ちは伝えたい。それに、そん

なことを繰り返さないでほしい。

そうすれば、少しは将人も救われる気がする。

祥子が自分の考えを言うと、咲良の母は電話の向こうで黙りこんだ。

「とりあえず。荻野先生や担任の先生と、もう一度話してみよう」

なるべく明るく言った。それでもダメなら、②奥の手がある。

「そう……でも、無理しないでね」

同情するような咲良の母の声に、気持ちが悪くなった。

担任の先生を通して、荻野先生と学校で話すことになった。

会社を早退して、人気のない夕方の校舎を訪れる。ふだん子どもたちの声でにぎわっているぶん、静かな校舎というのは、よけいに寂しくすら

寒さを感じさせる。

職員室に行くと、近藤先生がいそいそと出てきて、後ろから荻野先生もついてきた。

「ご無沙汰しております」

反射的に、体が硬くなった。荻野先生は、秀一の六年生のときの担任で、とても厳しい人だった。保護者がサンカンしている授業でも、容赦なく子どもたちをどなりつける。よく言えば裏表のない先生ではあるけれど、祥子から見ても怖い先生で、会うと背筋がぴっと伸びる。

会議室に通されると、スーツにネクタイ姿の校長先生も入ってきた。

「あ、いつもお世話になります」

祥子はあわてて立ち上がり、頭を下げた。たまに見かけるものの、校長先生は忙しくて、直接言葉を交わす機会はあまりない。

「秀一くんは、お元気ですか？」

開口一番、校長先生はにこにこと言った。いきなり長男の名前が出てきて、面食らう。

「彼の^{かれ}ことだから、中学でもご活躍^{かつやく}でしょう」

「は……ええ、秀一は元氣です。サッカー部に入って……」

「そうですね。勉強も運動もできて、文武両道。どうしたら秀一くんのような子を育てられるのか、お聞きしたいものです」

愛想^{あいそ}よくしているつもりかもしれないが、うちには一将や将人もいるのにと、③祥子は内心ムツとした。先生たちにとっては、秀一のような子が都合のいい子なのかもしれない。

校長先生は、まるで気にしない様子でパイプイスに座^{すわ}った。その左に荻野先生、右に近藤先生が座る。三人が正面に座り、圧倒^{あつどう}された。

「このたびは、何か誤解があったようですみません。将人くん、いかがでしょうか」

「はい……。まだ、学校には行きたくないようで」

一度は学校に行くよう言ったものの、一将から事情を聞いて、考え直した。とりあえず将人の気持ちをユウセンさせたい。

「それはご心配ですね」

校長先生が眉間^{みげん}にしわを寄せると、荻野先生が深々と頭を下げた。

「わたしの指導が行き届かず、すみませんでした」

「あ、いえ……」

目の前で謝^{あやま}られると、つい恐縮してしまいそうになるけれど、謝ってほしいのは自分にはない。

「あの、わたしは本当のことが知りたくて」

祥子は言葉に気をつけながら、一将や咲良から聞いたことをすべて話した。もちろん、チームの子に出るなど言われたことも。

「なるほど。朝練に出ている子たちは、将人くんに、もっとがんばってほしかったでしょう」

荻野先生ではなく、校長先生がまゆをひそめてうなずいた。

「特に低学年の子は、大縄跳びを跳ぶことすらできない子がいます。そのためには、やはり練習が必要なんです。荻野先生は忙しい中、朝早く学校に来て、その役目を買って来てくださっているんですよ」

荻野先生が、一点を見つめている。

「それはわかっていますが……」

「練習を重ね、跳ぶ回数が増えれば、子どもたちのやり抜く力もつきます。そのためにも、朝練には、ぜひ出ていただきたい」

「ええ、だからそういうことではなく……朝練は自由参加だったんですよね？ 将人は、自分が出なくちやいけないっていう自覚がなかったから……」

大縄跳びの意義や、がんばることのたいせつさを否定しているわけではない。どうして将人がみんなの前で怒られなければならなかったのか、聞きたいだけなのに。

「すみませんでしたっ」

近藤先生が、涙声で頭を下げた。

「わたしが朝練のこと、ちゃんと伝えておけばよかったです。今度からは、プリントで保護者の方にも伝えるようにしますので……」

荻野先生も再び頭を下げた。

なんなんだろう、この空気……。

これではまるで、祥子が先生に頭を下げさせているように見える。モンスターな親と、責められている先生という図が、いつの間にかでき上がっていた。

「学校のほうでも善処します。我々も協力しますので、将人くんが一日も早く登校できるよう、お母さんががんばってください」

なぜ校長先生に励まされているのか、自分の立場もわからなくなった。先生たちは、とにかく謝ることで、この場を収めようとしている。

違うのに……。

将人は下手なことを怒られた。しかも、みんなの前で。そのせいでみんなから責められ、学校に行けないでいる。

校長先生も荻野先生も、そのことは分かっているはずなのに……④わざと問題をすり替えているのだと感じた。

口を開きかけ、息苦しさにまた閉じた。

ダメだ……。向き合っているのに、相手は自分を見ていない。言葉を投げても、するりとかわされる。本音や意見をぶつけ合ってこそ、前向きな

答えも出てくると思うのに。

こうなったら奥の手を……。明日、PTAに訴えてみようかと祥子は心に決めた。

小学校に入ると、PTAという組織に関わる。

秀一が小学校に入学したとき、はじめての保護者会で衝撃を受けた。

「働いている人も六年間の中で、お子さん一人につき一回は、必ず役員や委員をしてもらいます」

それを聞いて、頭の中が真っ白になった。

PTAというのは、ニニイ団体じゃないの？ ボランティアじゃないの？ キョウセイなの？ と、混乱した。共働きや親の介護をする人も増えて

きた今、時間に余裕のある人はほとんどいない。PTAに入らないこともできるけれど、その場合、PTAが主催する行事に子どもが参加できないこと

もあるという。

「PTAの仕事を減らそう」と努力する人がいても、「今まで、これでうまくやってきましたから」とホシユ的な人は必ずいるし、デンカの宝刀のように「子どもたちのためですから」と主張する人もいる。改革とは、ナマヤサしいものじゃない。

しかし、最初こそ驚いた祥子も、次第にPTAの存在に慣れてきた。ソまったとも言えるが、そのたいせつさがわかってきたとも言える。やはり、学校任せでいけないと感ずることがたびたびあった。学校だって万能ではない。何か問題が生じたとき、対処できる組織がPTAのはずだ。

それに、今は共働きの親も多いから、お互いにフォロー（助けること）し合って、無理をせずやっていこうという空気もある。だからこそ、祥子も仕事をしながら、地域委員会の副委員長を引き受けようという気になった。

今日は、二か月に一度行われる、PTAの運営委員会だ。

会社で正社員として働いている祥子は、将人のために何度も休むわけにいかず、何かあったら電話するように将人に伝えてある。今日も午前中の委員会が終わったら、すぐに会社でできるよう、スーツを着て出かけてきた。

小学校の会議室に、次々と役員と委員が集まってくる。

PTA会長、副会長、会計、書記が座り、それを囲むように、学級委員、地域委員、広報委員……と、各委員長と副委員長が机を口の字にして座った。男性も複数いるけれど、まだ女性のヒではない。圧倒的に女性のほうが多かった。

「あれ？ 滝川さん、今日お休みじゃなかった？」

地域委員長が、声をかけてきた。各委員から活動内容を報告するのが趣旨のため、委員長か副委員長のどちらかが出ればいいということになっている。今回は、委員長が出席する番になっていた。

「すみません、ちょっと時間ができたので……」

祥子は、あいまに笑った。

校長先生は最初のあいさつだけして、ほかの会議があると言ってすぐに出ていった。それから会長の話があり、各委員会から報告があった。滞りなく過ぎてゆき、会議も終わりにさしかかったころ、会長が言った。

「ほかに、ご意見のある方はいらっしゃいますか？」

PTA会長は、祥子の家の近所に住んでいる梶尾さんという人だ。会長を決めるのは、くじ引きやジャンケンや話し合いなど、毎年困難を極める。しかし今年も、珍しくリッコウホで決まったと聞いて驚いた。早々に、しかも仕事ができそうな人に決まったことをだれもが歓迎し、安堵した。

⑤ そんな人だから、話を聞いてくれるかもしれないと祥子は期待した。

「はい」

覚悟を決めて、すっと手をあげた。みんなの視線が集まる。

「滝川さん」

梶尾会長が、首をかしげる。

「実は、先日こんなことがありました」

祥子は、荻野先生の名前を伏せて、大縄跳びのことを口かいつまんで話した。話しているうちに、自信がなくなり、こんなことを言っても無駄なんじゃないかと額に汗が浮かんだ。そして、きっと将人も同じ思いで何も言わないのではないかと、くじけそうになる気持ちを奮い立たせた。

「……何が真実か、はつきりさせるのは難しいですが、このようなことが起こらないようにするためにはどうすればいいか、みなさんのご意見を聞きたいのですが」

本音を言えば、「こんなひどいことが学校で起きているなんて、どう思います!？」と言いたかった。でも、それではただの愚痴になる。祥子は懸命に気持ちをおさえた。

しんとする会議室で、会長の声が静かに響いた。

「それは大変でしたね……。息子さんのことを思うと、胸が痛みます。それで息子さん、今は登校できていますか？」
同情するような声に、ほっとして気がゆるんだ。

「いえ、まだです……。お腹が痛いと言って」

空気がざわっとゆれて、あちこちでひそひそ声が起こる。

「それはいけませんね。まさか今も、家に一人ですか？」

え……？

祥子は言葉を失った。これから仕事に行こうとしていることまで見透かされ、⑥非難されているようにも感じた。

「学校にも問題はあるかもしれませんが、でも今は、息子さんが学校に行けるようにするほうが先決です」

「……そうですね。今のままでは、勉強も遅れるだろうし、かわいそう」

副会長も横から言った。

「でも、また同じことが起きないように……」

祥子が言いかけると、

「もちろん、このことは、わたしのほうから校長に伝えておきます。たまたま悪いことが重なってしまい、お気の毒でした。滝川さんは、しっかり息子さんについてあげてください」

と、⑦言葉の裏に冷たさを感じた。

祥子は唇をかみしめた。たまたま？ そんなふうに思えというの？

「滝川さん、子どものことを第一に考えましょう」

教え諭すように言われ、祥子は手をにぎりしめた。

以前、子どもたちに約束したことがある。「何かあったら。ママが全力で守るからね」と。

ぜんぜん、守れてなんかない……。

そう思うと、熱くなった喉元が、くっつとまった。無理やりこじ開け、そこから言葉をしぼりだす。

「……他人事だと、思ってる人も、いるかもしれません」

かたづけはじめていた人たちの手が止まる。

「もし、みなさんの子どもが同じ目にあっても……たまたま運が悪かったと思えますか？」

声が震える。まゆをひそめる視線を感じた。こんなことを言っても、かえって反感を買うだけだとわかっている、言わずにはいられない。

梶尾会長が、ふっと笑った。

「そうだったら、そのとき考えます」

手元のノートをトンツとそろえて、立ち上がった。

どうやって帰ったのか、気がついていたら家にいた。

会社に行くはずだったのに……後で電話をしておかなければと、祥子はぼんやりした頭で考えた。

疲れた……。

言葉が通じない。行動を起こすたびに、訴えかけるたびに、シンケイがどんどんすり減っていく。会社だったたびたび休めないし、これ以上は……。

テーブルに座ってため息をついていると、パジャマ姿の将人が二階から下りてきた。

「ママ、いたの？」

心細そうな声で言う。学校を休んでいる将人には、お昼に食べるお弁当をテーブルに用意してあった。時計を見ると、ちょうど十二時だ。

「うん、ちょっとね、用事があって……」

悔しさがこみ上げてきて、将人の体を抱き寄せた。

「お腹痛いの、治った？」

「うん。大丈夫」

「具合、悪くない？」

「……うん」

学校をずる休みしているという後ろめたさを、将人の全身から感じた。

「将人、ごめんね」

抱き締める手に力がこもる。

「ぼくもごめんね。先生に怒られちゃって」

将人が祥子の胸に顔を押しつけた。

「将人は何も悪くないよ」

祥子はあわてて言った。将人の体を引きはなそうとしたけれど、ぎゅっと抱きついてきて、はなれない。

「だってぼく、秀一兄ちゃんみたいに勉強できないし、カズ兄ちゃんみたいに運動できないし……得意なものなんて何もないよ」

ああ……。

小さな体を頼りなく感じた。今、将人は、自信を失っている。かけらも残っていない。

勉強が、運動が、なんだというのだ。ここにこうやって存在していることこそ、たいせつなのに。

祥子は、将人の背中をとんととなでた。

「将人だって、すごいところがあるんだよ」

「うそ……」

「うそじゃない。将人は、困っている人がいたら、だれより早く気がついて、助けてあげようとするでしょう？ それってだれにでもできることじゃない。勉強より、運動より、大切なことだよ」

パパが疲れてソファで眠りこんだとき、毛布をかけてあげるのは、いつも将人だ。サッカーで負けて悔し泣きをしている秀一にハンカチを差し出したのも、擦り傷を作って帰ってきた一将に絆創膏をはってあげたのも将人だ。祥子が家事に追われているとき、「手伝おうか？」と、声をかけてくれるのも。

祥子は、将人の目をのぞきこんだ。

「もしも、将人のような子をダメなんて言うなら……」

ひと言ひと言、自分自身に確かめるように言葉にした。

「それは、世の中のほうが、間違ってるんだよ」

「将人くんが一日も早く登校できるよう……」。

「息子さん、今は登校できていますか？」

「（

）」

そんな言葉を苦々しく思い出す。

いったい、なんのための学校だろう。

今までの祥子は、なんの疑いもなく学校も受けいれてきた。

みんなが行くから、

勉強しなくちゃいけないから、

将来のために、

学校に行くのは当然。

そのことを、疑問に思ったことすらなかった。

そんな思いが、ぐらぐらとゆらいでいる。

学校は、必ず行かなくてはいけないところなんだろうか。

もし、学校に行かせるのが義務なら……行きたくなるような学校にするのもまた、大人の義務なのではないだろうか。

「ただいまあ」

一将が玄関げんかんに入ると、家の奥からいいにおいがただよってきた。

「あれ？ 母さん、いるの？」

テーブルには、マカロニサラダやポテトフライ、シューマイ、コロッケ、から揚げあと、ごちそうが並んでいる。そして、テレビを見ている将人が座っていた。

「将人……何かあった？」

重々しかった家の空気が華はなやいで、軽かろやかに感じる。振り返かえる将人の顔も、やけに明るかった。

「⑧お母さんがね、もう学校に行かなくてもいいって！」

「え！？ マジで？」

驚いた一将は、キッチンカウンターの向こうで料理をしている母親を見た。ハナウタ交じりで、機嫌きげんがいい。

PTAの話し合いがうまくいったのか？ いや、それなら、学校に行かなくていいなんてことには……。

「だからね、ぼく、来週から学校に行くよ！」

将人の言葉に、一将は目を瞬またたいた。わけがわからない。でも、⑨どんよりしていた将人の目には光もが戻り、冬眠とうみんから覚めたカメみたいに活いき活いきしている。

いったい、どんな魔法を使ったんだよ。

一将は、将人の頭をくしゃくしゃとまで上げた。